

令和6年度
劇場・音楽堂等機能強化推進事業
(共同制作支援事業)
成果報告書／事後評価書

事業(公演)名	沼尻竜典作曲 歌劇『竹取物語』
代表団体名	公益財団法人びわ湖芸術文化財団
劇場・音楽堂等の 名称	滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール、大分県立総合文化センター(iichiko総合文化センター)、札幌コンサートホール Kitara、山形県総合文化芸術館(やまぎん県民ホール)
実演芸術団体等の 名称	なし
内定額	32,648 (千円)

1. 基礎データ

・ 公演に関する数値目標

入場者数計	6,340	入場者率(%)	75.3%		収益率(%)	20.3%
会場名①	会場状況・施設形式等	会場の定員数	設定席数	公演回数	補足事項	
滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール	大ホール	1,848	1,680	2	オーケストラピット見切れ席を想定	
会場名②	会場状況・施設形式等	会場の定員数	設定席数	公演回数	補足事項	
大分県立総合文化センター(iichiko総合文化センター)	大ホール	1,966	1,624	1	1階席、2階席のみ使用	
会場名③	会場状況・施設形式等	会場の定員数	設定席数	公演回数	補足事項	
札幌コンサートホールKitara	大ホール	2,008	1,605	1	Podium席売り止め、見切れ席を想定	
会場名④	会場状況・施設形式等	会場の定員数	設定席数	公演回数	補足事項	
山形県総合文化芸術館(やまぎん県民ホール)	大ホール	2,001	1,829	1	オーケストラピット見切れ席を想定	

2. 助成対象活動（公演）の実績記録と自己評価

(1) 評価項目「創造性・企画性」に関する評価指標・目標（値）

- ・ 助成対象活動（公演）について、実施会場ごとに自己評価を記入してください。

	会場名	入場者数		入場者率	評価指標	目標(値)	実績(値)	団体の自己評価	所見	備考
1	滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール	目標値	2,530	75.3%	観客満足度	アンケート回答者から	アンケート回答者から	目標値を十分に達成できました。アンケートには「親しみやすい」「初めてだが楽しかった」といった感想が多く、オペラ初心者でも十分に楽しめる内容であること、作品、公演として広く受け入れられたことが見受けられました。	観客の満足度は高かったと認められる。入場者率がもう少し高かったならばと少し残念である。	
		実績値	2,035	66.3%			「良い」以上が80%以上			
2	大分県立総合文化センター(iichiko総合文化センター)	目標値	1,220	75.1%	観客満足度	アンケート回答者から	アンケート回答から	集客にはとても苦労したものの、令和6年度のセンター主催公演の中では2番目に高い満足度を得ました。「親子で楽しめる」「オペラでこんなに楽しく笑えたのは初めて」「海外の方(留学生)が良く笑っていた」という内容の声が多数寄せられました。	観客の満足度は高かったと認められるが、入場者率が低くとどまり、事前の期待を高められなかったのは残念。	入場者率の伸び悩みについて、再分析を
		実績値	796	51.4%			「満足」以上が90%以上			
3	札幌コンサートホール Kitara	目標値	1,210	75.4%	観客満足度	アンケート回答者から「良	アンケート回答者から	目標値を達成できました。「オルガンに映ったプロジェクションマッピングに感動した」「舞台装置、音楽、皆素晴らしかった」などの声が寄せられ、いつもと違ったコンサートホールの楽しみ方を市民に紹介することができ、Kitaraの新たな可能性を見出すことができました。	観客の満足度、入場者率ともに目標を大きく上回った。	
		実績値	1,296	87.4%			かった」以上が90%以上			
4	山形県総合文化芸術館(やまぎん県民ホール)	目標値	1,380	75.5%	観客満足度	アンケート回答者から	アンケート回答者から	目標値を大きく上回りました。オペラ初心者からは「他の作品も鑑賞したくなった」という声が寄せられたほか、複数回鑑賞している方からも「これまで観たオペラで一番良かった」など評価が高く、オペラへの地域の愛着・関心を高める成果をあげました。	入場者率は目標値には至らなかったが、観客の満足度は高かった。	入場者率の伸び悩みについて、再分析を
		実績値	1,241	67.7%			「満足」以上が80%以上			

3. 自己評価

評価項目①:創造性・企画性

評価の観点
・先導性があり、特色ある実演芸術の事業企画である。 ・優れた芸術家、スタッフ等が才能、技能を発揮し、国際的水準の公演が期待できる。 ・我が国の実演芸術をけん引する成果、国内外での評価の向上につながる。

(1) 助成対象活動(公演)全体に対する評価指標と目標(値)

- 評価補助シートで設定した評価指標と目標(値)、及び、その達成度に言及しながら自己評価を記入してください。

評価指標	目標(値)	実績(値)	団体の自己評価	所見	対応・追加情報など
ホームページへのアクセス数	(全期間合わせて)各会館2000件以上	◆滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール 12,244件(公演ページ11,788件＋英語版 公演ページ456件) ◆iichiko総合文化センター 5,770件(竹取物語ページ) ※関連イベント含む8,713件 ◆札幌コンサートホール 12,566件(公演ページ9,804件＋英語版 公演ページ253件＋特設ページ2,509件) ◆やまぎん県民ホール 10,744件(公演ページ9,144件+やまがた オペラフェスティバル特設ページ1,600件)	いずれもホームページのアクセス数の目標値は十分に達成でき、注目度が高い公演となったことが伺えます。その要因は以下のとおりであると考えます。 ・地域の合唱、管弦楽を配し、各地域の特色が前面に出たプロダクションであったこと 事前取材記事が出るなど各地でも大きく取り上げられ、高い関心が寄せられました(大津:2024/11/16毎日新聞(滋賀版)、大分:2024/11/15大分合同新聞、札幌:2024/11/23北海道新聞、山形:2024/12/10山形新聞に記事掲載)。特に札幌コンサートホールでオペラを行うことはほぼ初めてであったためか、4館の中で最も閲覧数が高くなりました。他の3地域の会場とは全く異なる「コンサートホール」での上演となった札幌公演でしたが、各地から一流のスタッフが集結し、ホールの良さを活かしながらも映像を駆使して上演された舞台は非常に美しく、札幌コンサートホールでの、ひいては日本各地のコンサートホールでのオペラ上演の新しい可能性を切り拓く舞台となりました。 ・欧州で長年オペラ公演を指揮してきた阪 哲朗が、日本語のオペラ作品を指揮したこと 演奏は非常に高レベルであり、「阪指揮日本センチュリー交響楽団の色彩感を失わない機動性が場面の質を支えた」(モーストリークラシック3月号)との評を得るなど、本公演を世界水準に引き上げました。 ・びわ湖ホール声楽アンサンブルが各地でオペラ公演を行ったこと 公演評では「丁寧な日本語の処理と演技の幅の広さには目を見張るものがあった」(音楽の友)、と非常に高評価を受けました。またシングルキャスト(一部のみダブル)であることから全役にカバーキャストを配しましたが、すべて合唱などで関わっているプロダクションメンバーで務められたことは、びわ湖ホール声楽アンサンブルの実力の高さ、また層の厚さを実証するものとなりました。	◇ホームページのアクセス数だけを見ると、目標値を大きく上回っていて高評価が相応しいようにも思うが、事前の評判と事後の評判とを区別して分析し、定性的な評価につなげる必要があるように思う。 ◇地域で合唱に参加したいという人々の意欲を刺激し、それぞれの地域で長期間にわたって準備をした企画であることなど、事前の注目度を高めることには成功していたと思うが、それが必ずしも券売につながらなかった要因などの分析も必要ではないか。 ◇公演成果については、音楽専門誌等で公演評が掲載された点は評価できるし、自己評価として指摘されていることがらは妥当だと考えられる	

(2) 「創造性・企画性」が向上したことを示すエピソードやグッドプラクティス事例を記入してください。

■びわ湖ホール声楽アンサンブルの座組メンバーにて、カバーキャストも兼任。それにより予算の大幅な圧縮、また声楽アンサンブル個々のメンバーの研鑽となり、創造性の高い公演となりました。 【カヴァーキャスト】 かぐや姫…山岸裕梨 翁…林隆史 嫗…山内由香 帝…市川敏雅 石作皇子、大将…奥本凱哉 庫持皇子、阿倍御主人、大伴御行、石上麻呂足…五島真澄、砂場拓也 月の使者、石上麻呂足の使者…佐々木真衣 上記はすべて合唱もしくは本役を兼ねており、劇場入りしてから本役の体調不良などにも瞬時に対応することができました。 特に最終公演山形公演では、帝役が体調を崩し本番前日のGPを欠席。帝＝市川、阿部御主人＝五島が急遽代役を務め、職人は6名から5名でも出演できるよう公演日の朝まで調整しました。なお、本番は帝役も快復し、予定通り本役で上演しました。 ホール専属の歌手として、十分な稽古に参加し、全体キャストのレベルの底上げを行ってきたことがこういった結果として表れています。 ■公演評 ・音楽の友2月号 コンサートレビューに記載(2025年1月18日/大津公演11月24日/西澤忠史) ・モーストリークラシック3月号 公演レビューに記載(2025年1月18日/大津公演11月24日/垣花理恵子) ・北海道新聞 公演評に記載(2025年1月9日朝刊/札幌公演/八木幸三) ・山形新聞 舞台評に記載(2025年1月22日朝刊/山形公演/遠見塚木石) ・演奏年鑑2025 音楽会展望・東北に記載(山形公演/正木裕美)
--

評価項目②:地域性

評価の観点
・劇場・音楽堂等が単独では事業を実現しにくいような地域においても創造性の高い公演の鑑賞機会の提供を実現する計画である。

(1) 助成対象活動(公演)全体に対する評価指標と目標(値)

- 評価補助シートで設定した評価指標と目標(値)、及び、その達成度に言及しながら自己評価を記入してください。

評価指標	目標(値)	実績(値)	団体の自己評価	所見	対応・追加情報など
各地域の合唱の参加人数	各会場15名以上の地域の音楽家(アマチュア含)が参加	◆滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール 合唱51名＋ボーイソプラノ1名 ◆iichiko総合文化センター 合唱26名＋ボーイソプラノ1名 ◆札幌コンサートホール 合唱24名＋ボーイソプラノ1名 ◆やまぎん県民ホール 合唱20名＋ボーイソプラノ1名	・今回は主要キャストおよび核となる合唱はびわ湖ホール声楽アンサンブル(キャストは一部ゲスト歌手)が務めました。管弦楽、合唱、ボーイソプラノは各地の音楽家に出演いただくことで地域性のある公演となることを目指しました。各館がこれまで培ってきた文化的人脈を活かしてキャスティングや一般公募を行い、各地域ゆかりの音楽家(アマチュア含む)に多く参加いただきました。 ・各地域の合唱参加者数は十分に目標を達成することができました。合唱稽古は各館の担当者と密に連絡を取りながら、各地域の音楽指導者に事前稽古を行っていただき、劇場入り後はオケ合わせ・場当たり・ゲネプロなどオペラの上演に必要なすべての稽古に参加していただきました。プロのキャスト、スタッフとともに同じ舞台と一緒に創りあげたことは、参加者にとっても得難い経験となり、地域の芸術創造活動の振興に大きく貢献できたと考えます。本格的なオペラ公演の出演機会がそれほど多くないことから、「貴重な機会であった」「オペラにはまりそう」と、参加者の満足度は非常に高いものとなりました。また、大分・山形公演では合唱団の半数以上が大学生で構成され、一流のスタッフ、そして声楽アンサンブルという年齢が近く、次の目標ともなりうるプロの声楽家たちと共に舞台を作れたことは大きな刺激となり、地域の未来を担う人材の育成に貢献できました。 ・管弦楽は、日本センチュリー交響楽団、九州交響楽団、札幌交響楽団、山形交響楽団と各地域を拠点とし、活動するオーケストラが務めたことにより、各地域の管弦楽ファンがオペラ公演に足を運ぶ強い動機付けとなり、集客につながりました。 ・複数の公演地で各地域の特性を活かした制作をおこなえたことは、共同制作ならではの、非常に独創性、創造性の高い公演作りへのノウハウ蓄積につながりました。「地域の合唱団とボーイソプラノを地元の合唱団から選んだように、この作品が地域に根差すための種まきをした。」(音楽の友2月号)と評されたように、作品を通じて各地の芸術文化活動がより活発となり、今後の創造活動に大いにつながる公演になったといえます。	◇公演地ごとに地元のオーケストラを用い、それぞれで合唱団を編成しての企画で、地域の人々を巻き込んだ点で、それぞれに成果を得ていることは大いに評価できる。また音楽に親しむ人々の層を厚くしていく「種まき」として、今後の発展も期待できる。とりわけ、大分・山形公演における多数の大学生の合唱参加が、未来を担う人材育成につながる点が評価できる。 ◇オペラの上演に関与した人たちだけでなく、観客として集まった人々、あるいは、関心は持ったけれども観客とはならなかった人々についての考察が必要ではないか。	

(2) 「地域性」が向上したことを示すエピソードやグッドプラクティス事例を記入してください。

■各館が持つ文化的人脈を活かして合唱の参加者を募りました。 びわ湖ホールには開館当初から合唱参加者の一般公募の実績があることから、完全公募にて周辺地域から参加者を募りました。 iichiko総合文化センターや札幌コンサートホールでは、一般合唱を公募する経験はあまりありませんでしたが、地元の大学生や合唱団員を中心に参加者を集め、これまで親交の少なかった声楽分野での人脈を広げることができました。また、ある参加者からは、プロの声楽家であるびわ湖ホール声楽アンサンブルと同じ舞台に立ったことをきっかけに本格的に声楽を学ぶ道を考えているとの声も届いており、将来を担う地域の音楽家育成の一助となりました。 やまぎん県民ホールでは、前回びわ湖ホール、東京芸術劇場とともに制作した共同制作オペラ『こうもり』(令和5年度舞台芸術等総合支援事業(共同制作支援)対象事業)にて地域の音楽家を中心に特別合唱団を結成した経験を活かし、大学生を含む若手で構成された合唱団を組織しました。共同制作にて得た実績・経験を着実に次の公演制作にも活かすことができていると感じます。 ■演奏年鑑2025 音楽会展望・東北(正木裕美)より 「びわ湖ホールや東京二期会など他との連携も得て、オペラに通じた阪や山響が協働するやまぎん県民ホールのオペラ上演は、開館から4年間で、着実に全国と肩を並べつつある。」
--

評価項目③:多様性・アクセシビリティ

評価の観点
・人々の実演芸術に対する関心、参加への意欲を引き出し高めるような取り組み、工夫がなされている。 ・障害の有無や年齢、性差、国籍、居住地、経済的状況等に関わらず、幅広い人々が参加できるような配慮がなされている。

(1) 助成対象活動(公演)全体に対する評価指標と目標(値)

- 評価補助シートで設定した評価指標と目標(値)、及び、その達成度に言及しながら自己評価を記入してください。

評価指標	目標(値)	実績(値)	団体の自己評価	所見	対応・追加情報など
若年層の利用者数(24歳以下の来場者数)	全会場合わせて平均5%以上	◆滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール 23日96名(9%) 24日111名(11%) 計207名(10.1%) ◆iichiko総合文化センター 171名(21.4%) ◆札幌コンサートホール 170名(13.1%) ◆やまぎん県民ホール 157名(12.6%)	・誰もが知る古典文学を基にした日本語オペラ「竹取物語」を上演作品にとりあげたことが、非常に興味関心を引く結果となりました。アンケートに「日本語ということではじめてトライしました」「竹取物語をどのように表現しているかと興味がありました」とあり、オペラを初めて鑑賞したと回答した割合(大津:22%、大分:未集計、札幌:41%、山形:36%)からも、本作品を取り上げることがオペラ鑑賞の裾野を広げる一助になったことが伺えます。また、オペラ初心者にもわかりやすいということを前面に押し出し、各地、教育機関などと連携しながら、集客に努めた結果、青少年の来場率も高い公演となり、目標値も十分に達成することができました。 ・大津公演では、滋賀県教育委員会と連携して行った「舞台芸術体験事業」にて、県内の小・中学校の生徒をゲネプロに招待して2日間で567名の生徒に鑑賞いただき、より多くの青少年に鑑賞いただける機会の提供に努めました。昔話や学校の授業で取り上げられる題材でもあることから、生徒たちからは「オペラは今まで身近でないように感じていたが、自分にとって身近なものと感じることができた」「オペラは外国の話で固いものだと思っていたが、ユーモアがあるシーンや音楽もあり、もう一度行ってみたいと思えた」などの感想をいただきました。 ・英語字幕の掲出、プログラムの英語表記を作成して日本発のオペラを広く海外へも発信することを意識し、大津、大分、札幌では県の国際協会などを通じて各地の留学生を招待しました。大津36名、大分95名、札幌18名の留学生の来場があり、観客アンケートからは「I had a good experience watching Japanese beautiful opera performance.」「No words can express my feelings. Wonderful! Thank you so much!」「It was pretty good. I'll recommend it to my friends.」と日本の美を凝縮した日本発の舞台芸術が国籍に関係なく多くの方に受け入れられることも実証できました。	◇24歳以下の来場者の割合という指標は、4か所の公演地それぞれ、目標値を大きく上回っており、また、アンケートの集計結果からも、オペラを初めて鑑賞したと回答した割合が高かったことから、新規の観客創造に寄与した企画として評価できる。 ◇大津、大分、札幌では留学生を招待しており、英語字幕がある作品としての利点を活かせたと思うが、さまざまな観客に向けてのアプローチ、アクセシビリティの向上については、もう少し工夫があってもよかったのではないか。例えば、高齢者対応や障害者対応など、日常的に各会館では実施されていても、本事業で特に意識的に取り組まれたことでないから報告されなかったということがあったのではないか。 ◇また、チケット価格の設定についても、収益性の面からだけでなく、観客にとっての値ごろ感に対して妥当だったのかという点についても振り返りを行うことが望ましい。	

(2) 「多様性・アクセシビリティ」が向上したことを示すエピソードやグッドプラクティス事例を記入してください。

■各地域の特色、それぞれの地域の資源を活かし、様々な角度から本公演に関心を持ってもらう関連企画を充実させ、本公演の来場へと繋げることができました。 【大津公演】 ・無料のロビーコンサートを開催(11月10日):本キャストが出演し、作品の紹介、稽古の様子などを紹介 ・地元企業とコラボレーションした限定商品を作成、公演当日に各館で販売 【大分公演】 ・演出家と声楽アンサンブルによるレクチャーコンサートを地元の音楽家(ピアニスト)とともに開催(全3回/3月5日、3月10日、11月3日) 【札幌公演】 ・併設するレストランにてコラボレーションメニューの提供 ・同財団の文化施設と各施設のオペラ関連公演と連動したスタンプラリー企画の実施 【山形公演】 ・演出家による鑑賞講座の開催(9月7日) ・地元の美術系大学と連携し「竹取物語」から連想した美術作品の作成、および公演日にあわせて作品を展示(12月1日～12月13日、12月15日) ＜観客アンケートより＞ ・「ロビーコンサートを見て来場した」(大津公演) ・「大分で中村先生のレクチャーコンサートを受講し、その後東京に転居し、今日、山形で本作を鑑賞できてとても幸せです」(山形公演) ■大津公演では、令和6年度(第79回)文化庁芸術祭の連携公演として文化庁芸術祭のパフレット掲載やSNS発信など、制作館とは別の媒体からも公演情報を発信することができ、より広範囲での広報活動を行うことができました。
--

評価項目④: 自由設定(任意)

①創造性・企画性、②地域性、③多様性・アクセシビリティ、の項目では成果や課題に言及しきれない事柄について、自己評価を行ってください。

評価の観点

- (1) 助成対象活動(公演)に対する評価指標と目標(値)
- 評価補助シートで設定した評価指標と目標(値)、及び、その達成度に言及しながら自己評価を記入してください。

評価指標	目標(値)	実績(値)	団体の自己評価	所見	対応・追加情報など

4. 総評

・ 団体の自己評価

・劇場に専属の声楽家集団を擁し関西を代表する劇場として開館25年を経た「びわ湖ホール」、オペラなどの舞台芸術はもちろん様々な機能が集まった複合施設として多種多様な芸術を提供する「iiichiko総合文化センター」、札幌交響楽団の本拠地でもあり世界有数の響きと美しさを持つ北の芸術拠点「札幌コンサートホールKitara」、2020年の開館以来山形県のカ文化芸術活動の発信拠点として魅力的な事業を展開する「やまぎん県民ホール(山形県総合文化芸術館)」の4館が、それぞれに培ってきたオペラ制作や公演制作のノウハウを結集し、各地域の特色を前面に打ち出した最高峰の舞台を各地域で実現させることができました。 ・会場の形状が違う4館での新制作となったため、各館との打ち合わせや下見は念入りに行い、各自アイデアなどを出し合って各館の良さを活かしつつ、予算の削減も意識した舞台制作をおこなうことができました。オペラ上演はほぼなかったという札幌コンサートホールでしたが、ホールの構造を活かし、映像を駆使し上演された舞台は非常に美しく、札幌コンサートホールでの、ひいては日本各地のコンサートホールでのオペラ上演の新しい可能性を切り拓く舞台となりました。 ・誰もが知る古典文学を題材とした作品であり、日本語上演、日本の昭和歌謡を意識した親しみやすい音楽で作られた「竹取物語」をとりあげたことが、広く鑑賞者の裾野を広げる結果につながりました。「日本語ということではじめてトライしました」「竹取物語をどのように表現しているかと興味がありました」といった鑑賞者アンケートからも、その様子が伺えます。また、それらを積極的に広報し、各地の教育機関や、行政と連携し、より多くの青少年に鑑賞いただける機会の提供に努めたことで各地の青少年の入場率も4公演地の平均が14.3%となり、青少年への鑑賞関心を広げる公演とすることができました。 ・英語字幕の掲出、プログラムの英語表記を作成し、地域から直接海外へ発信することを意識しました。大津、大分、札幌公演にて県の国際協会などを通じて招待した留学生の公演後アンケートでは非常に好意的な感想が多く、日本の美を凝縮した日本発の舞台芸術が国籍に関係なく多くの方に受け入れられることが実証できました。 ・指揮はヨーロッパで四半世紀にわたり歌劇場の要職を経験し、日本国内でも山形交響楽団常任指揮者、びわ湖ホール芸術監督を務める阪 哲朗が務めました。本場で培ったオペラ指揮者としての経験を生かし、各地で変わるホールの響き、オーケストラ、合唱の特性を的確にとらえ、音楽的に充実した公演を創り上げました。阪の指揮は本作品を世界レベルの上演に引き上げ、日本発のオペラ作品の価値を高めました。 ・キャストには、びわ湖ホールが開館当初より「創造する劇場」という方向性を打ち出し、設立した劇場専属の若手声楽家集団「びわ湖ホール声楽アンサンブル」を中心キャストに据え、劇場専属だからこそ実現可能な充実した稽古と調和したアンサンブルで作品の魅力を最大限引き出すことを可能にしました。第一線で活躍する舞台スタッフのもと、日本語を美しく歌うためのフレージング、所作や日本語の扱いを丁寧に掘り下げた結果、「丁寧な日本語の処理と演技の幅の広さには目を見張るものがあった」(音楽の友)、「先入観として台詞や歌詞が聞き取りづらいことを覚悟していましたが、全くそんなことはなく声が響き、言葉も理解でき、嬉しかったです」(山形公演アンケート)と、日本語の発音が明瞭であり、それぞれのキャラクターを活かした高い演技力を見せ、外部から高評価を受けました。また、同作品の複数回上演は、キャストにとって演技・歌唱を深め、大きな成長に繋がる貴重な機会であり、またシングルキャスト(一部のみダブル)であることから全役にかバーキャストを配しましたが、すべて合唱などで関わっているプロダクションメンバーで行ったことで予算を大幅に圧縮でき、メンバーにとってはカバーキャストとして様々な経験を積むことができました。若手で構成されるびわ湖ホール声楽アンサンブルにとっては非常に学びの多い機会となり、全体のレベルの底上げ、そして未来の日本オペラ界を担う歌手の育成へとつながる公演となりました。 ・合唱・ボーイソプラノには各地が培ってきた文化的人脈を活かし、アマチュアを含む各地域の音楽家が出演することで、多くの方がトップレベルの舞台芸術に直接触れ、得難い一体感と達成感を味わうことができる機会を創出できたことは、地域の芸術創造活動の振興に大きく貢献しました。また大分、山形公演では合唱団の半数以上が大学生で構成され、地域の未来を担う人材の育成にもつながりました。管弦楽は日本センチュリー交響楽団、九州交響楽団、札幌交響楽団、山形交響楽団と各地を拠点とし、活動するオーケストラが務め、各地域、そこでしか聴くこと、見ることのできない特色ある公演を可能にしました。 ・チラシ制作においては共通デザインをあえて作らず、各地の特性に合わせて作成するなど、広報に関しては情報を共有しながらも各館の特色を活かした広報を行ったほか、映像制作を得意とする館の広報用映像を他館でも共有するなど、単独では難しい積極的な広報を展開することができました。 ・関連企画については、大津公演では事前に作品を紹介する無料のロビーコンサートを開催したほか、地元企業とのコラボレーション商品を作成、本番時に各館で販売し、地元で馴染み深い商品を他地域にも知っていただく機会となりました。大分公演では出演者によるレクチャーコンサートを地元の音楽家(ピアニスト)とともに全3回にわたって開催、札幌公演では食とのコラボレーションとスタンプラリー企画による広報の実施、山形公演では演出家によるレクチャーや地元の美術系大学と連携した作品の作成など、それぞれの地域の資源を活かし、様々な角度から本公演に関心を持ってもらう取り組みを行いました。4館で密に情報交換を行い、アイデアを共有し、それぞれ充実した関連企画を実施したことで、本公演への集客につながりました。 ・本公演を通して、4館の制作スタッフや舞台スタッフが各地の現場に積極的に赴いてそれぞれの地域、分野で培ってきたノウハウを活かし、共有しながら公演成功に向け協力できたことは、共同制作でしか成しえない人材交流であり、非常に創造性の高い公演の制作につながる糧となりました。また、コンサートホールという形状の違う館との大型公演での連携は、新たなオペラ制作の可能性と制作手法の気づきに満ちたものでした。今回培ったこれらのネットワークを活かし、次年度以降の事業についても新たな取り組みをおこなっているところであることから、今回の公演がこれからの日本全体の舞台芸術振興にも高く寄与した公演であったと考えます。

・ 所見

◇劇場専属の声楽家集団「びわ湖ホール声楽アンサンブル」を中心にしたキャストでオペラ上演ができ、4か所それぞれで好評を得たことは大いに評価できる。観客満足度について設定した指標は、4箇所の公演すべてで目標値を上回っている。ただし、入場者率では、札幌公演以外は目標値を下回っており、よく知られている竹取物語を題材にした日本語による上演だから、オペラに馴染みの少ない観客にも親しみやすかったと推測される一方で、コアなオペラファンは必ずしも集められなかったという側面があったのではないか。地域の人々へのオペラの浸透度は、大津、札幌、大分、山形で異なると推測されるので、どのような観客にアプローチできたかという結果に対する評価は一律ではないと思う。地域性の観点から評価する際には、それぞれの地域の観客分析について、もう少し踏み込んでなされることを期待したい。 ◇再々演の演目であり、創造性・企画性において先導性があるとまでは認められず、また、演出的に過去の上演時とどこを変えたのか、プログラムにあった過去の写真や演出家のコメントからして、新演出とは言い難い点が散見された。びわ湖ホール以外での上演ではそれぞれに空間構成や動きの再検討の必要があり、衣装も新しくしたというが、本支援事業の助成対象は「新たな創造活動(新作、新演出、新振付、翻訳初演等)」による公演としていることから、どのような点で新演出としようとしたか、もう少し明らかだとよかった。初演の基本枠組みを踏襲するにしても、演出上の改善の余地はあったように思う。日本語の創作オペラでポピュラーな作品が少ないなかで、このように再演がなされている演目は貴重であり、今後再演されていくならば、さらなる練り直しを期待したい。 ◇青少年の入場率が平均で14. 3%となり、目標値を大きく上回った。4か所の公演地のうち、びわ湖ホールにおける大津公演の青少年の入場者率が低めにとどまったのは、ゲネプロに小中学生招待をしていることと関連があるのかもしれないと考えられるが、総じて若年層に親しみやすいオペラとして受け入れられたと評価している点は注目できる点である。 ◇大津、大分、札幌で留学生を招待したという点は、アクセシビリティを広げていく試みとして評価できる。集客のための工夫は各地で行われたようだが、多様な観客にアプローチできるよう、より一層の取り組みを期待したい。
--